資料１

平成 27 年度 第 3 回岐阜県総合教育会議 浦崎太郎 発表資料

１．いま可児で何が起こっているのか？

・可児高校では「授業のアクティブラーニング（ＡＬ）化」と、地元との協働による「地域課題解決型キャリア教育」を推進している。

２．なぜ、地域は進学校に必要なのか？

・子どもや若者が無理なく成長を遂げるには、“集団”との関わり方を体験的に学び、社会性を段階的にステップアップできる地域環境が必要である。
・子どもの学力や社会性が向上するかどうかは、かなりの程度、幼い子をもつ母親の孤立感を解消できるコミュニティがあるかどうかにかかっている。
・昔は、子どもに豊かな遊びが十分に保障されていたため、授業でじっくり学び深めることが可能だった。対照的に今日は、子どもの遊びが貧困化したため、授業で動機づけに膨大な労力を要し、じっくり学び深める時間が奪われてしまった。

３．なぜ、地域に進学校は必要なのか？

・六次産業化が必要となった今日、若者には、起業や創業をできる実力が必要となり、地元に残るためにこそ進学が必要になった。

４．アクティブラーニング… いつ・どこで・何を？

・ＡＬの実効性向上には、大人との地域課題解決活動（社会教育）とＡＬ型授業（高校教育）をセットで用意し、両者の接続性を高める意思疎通が必要である。

５．岐阜県で実現したい「地域と教育の一体的再生」

・今日、「地域は高校に負担を与え、高校は地域に負担を与える」悪循環により、地域と高校は共倒れに向かって疾走している。
・地域が「コミュニティ再生」、高校が「地域課題解決型キャリア教育」を展開すれば、好循環に転じ、地域と教育の一体的な再生が可能になる。
・地方が衰退する悪循環を回避できなかった一因として、特に高校生段階において「“地域”の将来を担う次世代の一貫的な育成に対する責任の所在が不明瞭だった」点を指摘できる。
・協働の重要性に関する理解を共有した上で、県には「市町村を通して市民団体等に協働の支援を行う」こと、県教委には「高校に対して協働の支援を行うとともに、高校生の地域参加を促す」ことが期待される。